

記念講演「地域文化とまちづくり」

佐々木均太郎氏（別府大学教授）

演題「地域文化と町づくり」

（拍手）皆さん、よくおいでになりました。先ほどから進行の方にご協力していただきましてありがとうございます（笑）。

私は先ほどご紹介いただきましたように、雪舟さんがここ大野町の沈墮の滝の絵を描いたという素晴らしい関係がございまして、その町づくりの一環としまして、「沈墮の物語」を新しい創作民話で書き直してみたわけです。お手元に皆さんいただいていると思いますが、雪舟と沈墮にまつわる民話を後ほどごらんになっていただけますと大変ありがたいと思います。

この雪舟さんは日本的どころか世界に非常に有名な、例のウィーンの世界平和会議で世界の文化功労者として、10人の中に、モーツァルトだとかハイネだとか、そういった方々の中に入っているのが雪舟さんでございまして、その雪舟とこの大野町が非常に関係がありますし、今日おいでになりました5つの市や町も非常に関係があるわけございまして、そういうサミットに招かれまして、私も話ができますのを大変光栄に思っているわけでございます。そこで今日は「地域文化とまちづくり」というテーマを与えられているんですが、お手元にも簡単なレジュメを差し上げていると思いますので、それを見ていただきながらお話を聞いていただきます。

文化というのをどのようにとらえるかということ、これ、非常に難しいんですね。文化というのはいわゆる、英語の“culture”、カルチャーというのを訳して文化になったんでしょうが、文化と、よくもう一つの言葉で“文明”という、これは英語で“civilization”と訳しておるようございましてね。そうしますと、何か私は文化と文明というのはちょっと違ったニュアンスがあるように思えてならないんです。そこで私はレジュメにも書いておきましたように、文化というカルチャーの語源は“クリツラー”というギリシャ語から来ているんでしょうが、大地を耕す農耕を意味しているんですね。そして植物を栽培して世話をするというような、そういう語源が文化の方にあるんです。耕して栽培して世話をすると。もっと言えば、心を耕して世話をしていくというような、非常に“心”の方が、強い言葉が“文化”というふうに私はとらえています。

で、文明というのはどちらかというと物、これは文明“civilization”を“開化”とか“進化”とかいうふうなもので訳しておりますが、明治時代にこの“文明”という言葉がはやりましてね、「散切り頭を叩いてみれば、文明開化の音がする」なんていう言葉もありましたんで、そういう“文明”という言葉の中には、何か便利なものがどんどん開発されてゆく、つくられていくというような“物”を中心にしたものが、文明というような言葉にとらえられるわけでございます。

そうすると文化というのは心、文明というものは物、というようなとらえ方をしますと、

ここで私たちが“物と心”をどのようにとらえていくか。物も大事ですよ。よく「物の時代から心の時代」なんていうんです。私も福祉に関係しておりますので、よく「物の福祉から心の福祉へ」なんて言っていますが、では、次は何でしょう。また“物”に帰るのでしょうか。

そんなものじゃないと思うんですね。物も大事なんです。これだけ素晴らしい物質文明ができたというのは、大変素晴らしいことですね。物も大事なんです、ただ、物だけであまりにも突き進んでいくと、大変大事な“人間の心”というものが忘れられていくという、現在の全世界的なあり方ではないだろうか。ということで反省させられているのが、今の時点じゃないかと思うんですね。だから、もっと物と心というのをどう私たちがとらえているか。

これは、17世紀にヨーロッパでですね、フランスにデカルトという哲学者が生まれて、このデカルトが「人間は物と心を別々に考えた方がいい」という、デカルトの「二元論」という哲学を出しましたね。物は物、心は心、別なんだ、と。そうしますとね、この物質文明が非常に発達してきて人間の体も、これは肉体はひとつの物体だと。そうしたら切っても貼ってもつないでもいい。心臓を入れ替えてもいい。それで医学がバーッと発達した。で、心は別に考えて。こういう考え方が、17世紀以来全世界的なひとつの枠組み、これをパラダイムというんですが、そういうパラダイムが、ずっと流れて今日まで来ているわけですね。そのために物の方は非常に発達していったんですが、心が追いついていない。そういうひずみが今たくさんいろんなところで出てきているわけですね。

特に日本という国は物があふれておりますね。あの有名なインドのマザー・テレサさんという、困った人を看病している方でございますが、ノーベル賞をもらった、ね。あのマザーテレサさんが、日本に2回まいりました。私、1回講演を聞いたことがあるんですが、2回とも帰るときにですね、同じ言葉を言っております。「日本という国は物は大変豊かな国ですが、心の貧しい国ですね」と。

これはグサリと刺さりますね、私たちに。ええ、そういう点で、この心の問題というのをもっと私たちが考えなくちゃならない時代に今、来ているような気がするわけでございますね。そういう点で、17世紀以来のこの物と心を分けたデカルトの二元論が、もう一度そのパラダイム、枠組みを考え直そうという。こういうものが世界的には起きてきているんですよ。

ところが私はですね、この日本の国は7世紀から8世紀の時、「万葉集」という素晴らしい歌集が残されているんですよ。私の専門がだいたいその「万葉集」なんです（笑）。しかしその「万葉集」がですね、歌を読んでみますと、あの時期に、物と心をひとつに考えている。これは非常に重要なものを示唆しているんですね。

私が自分で言うとお田引水のようにありますが、糸川英夫博士という方をご存じでしょう。東京大学で長いこと工学部の教授をされて、今やめられてですね、フランスの国立大学のパリ大学の教授をされているんですがね。工学博士で戦時中ははやぶさ戦闘機、あれ

は早かった。私も軍隊へ行きましたが、素晴らしい戦闘機でした。ああいうのを設計した方。戦後は宇宙ロケット第1号を設計して打ち上げた方ですね。その糸川博士がパリ大学で、去年11月に「万葉集」にチャレンジするという「万葉集に挑む」という本を書いて「万葉集」のあの考え方が、今後の世界的なひとつの大きな影響を及ぼしていくんだ、というふうなことを、昨年11月に書いているんですよ。工学博士がですよ。

それはどういうことなんだろうかと思えますと、先ほど申しましたように、この「万葉集」には、この人間の心と物を一元に考えようという、こういう考え方が非常によく出ていますね、歌に。4, 516首ございます。それが20巻にまとめられてね。

そして天皇様のお歌から皇族の歌、朝廷に仕えた人の歌ですね、こういう方々全部名前が載っておりますが、4, 516首の半分以上が、詠み人“知らず”じゃなくて“詳しく知らず”という方まで載っているんですね。だから、名前は本当はあるんだけど、位は何もないから載せないという、そういう方々の歌が、半分以上ですよ。だから農業をやっている人の歌、それから漁師さんの歌、この我が大分県の豊後水道のそ漁師さんの歌もちゃんと巻第十六に載っております。それから大分でいえば、竹田地方の乙女の歌が載っております。

それから、ほかえ人という人の歌が載っていますね。ほかえ人という人は何でしょうか。これはどういう職業でしょうか。当時は、「万葉集」っていうのは全部日本古来の言葉で詠まれていますね。そのほかえ人っていうのは日本古来の言葉、我々これを倭言葉というんです。それに漢字が入ってきまして、漢字を当てはめたんですね。

だから「万葉集」の原点は、全部漢字ですよ。まだ平仮名・片仮名、その300年後にできるんですからね。だから、まだできていないんです。すると、その漢字を当てはめればほかえ人というのはすぐわかります。何と当てはめているのかというと“乞食者”と当てます。乞食なんです。人の家の前で芸をして、食べさせてもらう。そういう乞食の歌が、この朝廷に仕えた人たちや皇族の方々と一緒に並べられて載っているんですね。こういう歌集というのは、ちょっと世界に類がないんじゃないんでしょうか。奇跡的ですね、こういう歌が残っているというのは、不思議に思えるぐらいですね。

そういう歌を見まして、その心と物というのをどうとらえているか。当時の人たちは...心というのは見えないでしょ。見えませんから、裏にあると考えていた。だから“裏”という倭言葉は、この心のことでしょう。“うら寂しい”“うら悲しい”、これは心悲しいことです。心寂しい。“うらやましい”もそうです。心が疚しいんです。“うらめしい”もそうですよ(笑)。そういう“裏”にあると考えたんですね。

裏にあつたら見えませんから、これを表に見えるものに寄せて、これは「万葉集」は寄物、物に寄せて、と書いてある。そして心を述べる。そういう歌だと。ちゃんと「万葉集」にはそういう“物に寄せて心を述べる歌”とある。だから、物に寄せたんですね。一番寄せられたのが、身に付けているこういう衣、着物です。だからね、「万葉集」の歌の中で袖振りの歌がいっぱい出てくるんですよ。

ちょうどお手元のレジュメに3首ほど私、そこに挙げておきましたがね、1番のが袖振りの歌。これ1首じゃないんです、いっぱい出てくるんです。これは有名な額田王の歌ですね。女性の額田王が作った歌でございます

「茜さす 紫野行き 標野行き 野守は見ずや 君が袖振る。」

「君」といったら、女性から当時は男性のことを指すんですね。あるいは妻から夫をいうときに「君」といいます。だから「君が袖振る」ですから、向こうの男性が袖を降っている。しきりに。そういう歌でしょう。でも、ただ袖を振っているだけじゃ、これは何のことだか馬鹿な歌になりますね。

ところが袖を振るということは、実は「あなたを愛している」という、愛の心の表現なんです。横に振るんですよ、こう横に。袖って当時は長くありません、これくらい。男女共通ですね。これを横に振りますと「あなたを愛しています」という愛の心を表現する。もっといえば、愛の心を袖という、見える着物に寄せて表現したわけですね。だからめったに振られないんです、これは。めったに振られません。それで「あなたを愛していますよ」というと、向こうも「はい、私もあなたを愛しているよ」と横に振り合うんです。

しかし、いつもいいわけないですわね。いくらこっちが一生懸命「愛しているよ」と振ってもね、向こうが駄目だというときはどうするかといいますと、縦に振ります。「駄目だ〜！」って（笑）。これは駄目なんですね。ここから“振られる”という言葉が出てきます（笑）。彼女から振られたというのは、こっちの方でございますよ。

こういう、この袖という着物の中に愛の心を表現したんですね。だから日本の文学で、その後の文学で「袖」が出てまいりましたら、全部これは愛、男女の愛、夫婦の愛をあらわしています。いわゆるエロスの愛をですね。人類愛とか親子愛じゃなくて。エロスの愛をあらわすんです。だから、夫婦と一緒に寝るなんて下品な言葉は使っていません。「袖を交わす」といっている。きれいでしょう。「袖を交わす」。どうぞ、こういうお言葉をお使いくださいませ（笑）。そういうような、きれいな表現なんですね。

そして、当時は夫が通ってくるんですよ。実は当時の結婚は全部夫が通います。女は今のように入嫁、男のところに嫁入りするのは鎌倉時代以降です。それまでみんな、夫は外から通うんですね。

それでこの妻の家の前まで来るとですね、パスポートがいるんです。それはそうでしょう、変な男を入れたら困りますからね。危ないですから。パスポートといっても、今のようないパスポートじゃなくてですね、妻の名前を呼ぶんです。石川郎女でしたら「石川ちゃん」、あ、“ちゃん”なんて言わんでしょうが（笑）呼びますと「ああ、我が夫の声だな」と証明されて入るんですね。これを、妻の名前を呼ぶので「よぼう（呼ばふ）」といったんですね。「よぼう」と。そうしますと、お気づきになっている方がいるようでございますが（笑）かつて長いことありましたあの風習「夜這い」という風習がありました。あれはもともとは、妻の名を呼ぶことですよ。

そして一夜袖を交わして、朝方帰る。夜の明け切らないうちに帰らないといけないんです。そうすると、妻がまた送りに外まで出て、この別れを「袖の別れ」と言っている。きれいでしょ。「袖の別れ」。そしてね、妻がひょっとしたらわが夫は今晚から通ってこなくなるんじゃないだろうか、と心配してですね、ひそかに涙を流します。この涙をね、「袖の露」といっているんです。きれいでしょ。泣きの涙やら言わないんですよ、「袖の露」ですよ（笑）。こういう表現になっていくんです、日本の文学は。

だから直接「愛しているよ」とか言葉を使わないんです。いわゆる、心から物に、そして言葉に行ってしまう、そこに三角形を書いてあります。そしてそれはまた、その言葉を心で味わう。この三角形の中にできたのが、日本の独特な表現でございます歌なんです。だから、心と物と言葉というのが、最高の、もっと言えば人間の一番の魂たる三要素。これを実にうまく使ったのが歌なんです。だから、言葉にすぐ行きません。「愛しているよ」なんて。

あの「僕は君を愛しているよ」というのは明治時代以降ですよ。日本で広まったのは。誰が一番最初に使ったかというのは、これには2つ説があるんです。二葉亭四迷という作家が小説の中で使ったというのとですね、夏目漱石先生が使った。私は漱石説を採っているんです。漱石先生がイギリスに留学して、帰ってきて、この小説の中で英語の“ I love you ”の“ love ”を“ 愛している ”と訳したんですね。そこから広がっていくんです。それまで一切使っていませんよ。私なんか今でも使えないんです、ええ。家内と結婚して、私、結婚記念日が1月4日ですけどね、この46回目の、今年は結婚記念日だったんです。家内に向かって「お前、俺、まだ愛してる」（笑）そんな言葉ね、身の毛がよだつようになりましてね（笑）。使えないんです。だからこうやっつけばいいんですよ、こうやっつけば。

こういうね、この生き方が日本のいわゆる物と心を一つにしちゃった。これは非常に重要な考え方なんです。これからの21世紀にかけまして。物と心をひとつにする。これは、これまではね、このデカルト的考え方は“ 物と心を一緒に考えるなんて幼稚な考え方だ、アニミズムだ、幼い子供が考えることだ ”と、こうして退けてきていた。そうじゃないんです。むしろ、それが今からの21世紀にとって非常に重要だと。

去年、アメリカのコロンビア大学で国際アニミズム研究会という大会が持たれた。そして日本のそういう考え方を非常に重視してきているんですね。で、今年アメリカに行った私の友達が帰ってきて、今アメリカの大企業がですよ、21世紀に向けてひとつのコンセプトという理念を出しましたが、今まではアメリカはフロンティアです。例の開拓精神ですね。ところが、21世紀は違うんだ。どういうことを掲げているかということ、心の安定を皆さんに与える、供給すると。こういうものが21世紀のアメリカの大企業のテーマだそうです。心の安定を皆さんに供給する。与えるというのがね。こう変わってきているんです。

それは、物を通してその中に心という日本の考え方です。だから「万葉集」には、もう一つ、もう一つだけ言わせて貰いたいんですが、紐をね、結ぶ。こう結びますと、結んだ人の心が非常にそこに入ると、こういう信じ方があって、この歌がいっぱいあるんです。

当時旅に出ているときは、旅は危険ですからね、夫婦の間でどうしたかという、妻の着ている下着を夫に着させ、夫の着ている下着を交換して、お互いに紐を結びあう。そうすると、結んだ妻の心がこれに入る。だから、夫は旅を続けている間は妻が常に身のそばにいて守ってくれている。旅の安全を。そういう信じ方があったんですね。この“結ぶ”というのをね、非常に心が入ると。

2番目の歌がそうです。これは有名な柿本人麻呂の歌なんですね。人麻呂が淡路島に旅に行ったときの歌ですよ。

「淡路の 野島が崎の 濱風に 妹が結びし 紐吹きかへす」

“いも”という字は“妹”という字を書いています。これは男性から女性をいうときに“妹”、あるいは妻を呼ぶときに“妹”というんですね。妻が結んでくれたあの紐を、淡路島ですからね、浜風がひらひらと吹き返しているわけです。ただそれだけだったら、馬鹿みたいな歌でしょ。“紐がひらひら”だったら。ところが、この紐が単なる紐じゃないんです。妻の心です。だから、これが風でひらひらとしますと、そこに妻の面影がこう出てくる。そして、遠くに離れて会えませんので、その会えない淋しさにじっと耐え忍んでいると、妻への愛情がグーッと盛り上がってきましてね。妻は淋しく待っているだろう、早く帰らなくちゃいけない、という裏に心があるんです。そのぐらいの心を読みとらないと、この歌なんて馬鹿みたいなんです。ただ紐だけ、紐がひらひらしているだけで。その物の裏に、心があるんですね。だから紐が単なる紐じゃなくて、心なんです。

そういうね、頭にその心を描いて読みますと、この歌はいいですよ。もう一度いいですよ。「淡路の 野島が崎の 濱風に 妹が結びし 紐吹きかへす」...いいでしょう？読み方もいいんですが（笑）

そういうですね（笑）裏に心があるという、これですね。その中に紐だけじゃない。だから結ぶというね、今、新しい心のあり方というのでね、どこに心があるんだろうか。これはいろいろ問題になりますね。

たが、今は脳の中にあるんだという考え方が非常に強くなってきているんですが、私も言語学を勉強してみると、言語というのは脳なんですね。だから、心がここにあるのかと思っていましたら、世界的ノーベル賞なんかをもらった脳生理学者がですよ、「脳の中に心はないんだ」というんですよ。これは形で見えるから。見えるでしょ。心というのは見えないものなんです。そうするとね、どこにあるかという、ノーベル賞をもらったアメリカのカリフォルニア大学の、工科大学の、スペリー教授、1987年に脳の生理学でノーベル賞をもらっている。そういう方々が言っているんですよ。あるいはカナダのペンギールという博士が。

どこにそれじゃあるかという、私が誰かとか会って、そしてここでふれあうこの中間の中に心というものは生じるんだ、と言うんです。この中間の中に。これはすごい考え方ですね。だから、私なんかがある人に会いますと「ああ、あの人は背が高かった」とか「鼻が高かった」と言うよりも、残ってくるのは「ああ、あの人の人柄はよかったな、何か豊かな心を持っているな」なんていうものなんです。あれが心なんです。だから、この形あるものの中にはないというんです。脳というものには。

これはあの、私、専門ではありませんから、物理学の先生に聞きますとね、素粒子学といます、粒子、超粒子、一番小さいのもわかっている。あの中で分子、原子なら原子、あの原子と原子が、こう、ここで中間のエネルギーが大事だというんです。これが。これだけじゃ、原子だけじゃ、あったって駄目なんです。この2つがふれあうこの中間に、ひとつ働くものが大事なんです。これが、あの湯川博士の中間子論というものらしいんですね。で、その中間子論は、そのヒントは、湯川博士の書いているものを見ますと、般若心経からそのヒントを得たというようなことを書いてありますね。これが非常に大事なんです。

すると日本の「万葉集」もね、紐と紐をこう結ぶ、この中に心が入るといのはすごいでしょう。こういうことを「万葉集」は歌っているんです。だから糸川工学博士がパリ大学で唯一「日本の『万葉集』はすごい」という、そういうことになるんですね。

そういう“結ぶ”ということを非常に大事にします。だから日本の神様で一番古いのは、何でしょう。「古事記」なんかを見ますと、伊弉諾（いざなぎ）、伊弉（いざなみ）じゃありませんよ。その前の神様。

神産巢日神（かみむすびのかみ）です。“結び”の神です。高皇産霊神（たかみむすびのかみ）です。そして“むすぶ”というのも産まれる、お産の、お腹から産まれる、お産の“産”と霊、心霊の“霊”、幽霊の“霊”ですね。心。心が産まると当てている。心が産まれることなんです、“結ぶ”というのは。だから高皇産霊神、神産巢日神ね。

その“結びの神”で、間に結ばれた子供ですから息子というんです、これが（笑）、息子とね。女の方は“女（め）”ですから、これを娘という。だから、私たち気安く“息子”“娘”と使っていますが、これは実は結ばれた子供。結ばれた女（め）、女なんです。そういう、非常に重要な意味を持っているんですね。

私がお婆さん育ちで、お婆さんに6年生まで育ててもらったんですが、お婆さんが昔はね、お釜で焚いていましたから、お焦がれを「これは何ですか」「おむすびというんだ」というんですね。おむすびなんです。

今“おにぎり”といますが、いけませんよ、あれは。“おにぎり”というものは、あれは片手で握るときを“おにぎり”というんです。にぎりというんです。ちゃんと言葉を、大切に使わないといけない。だからあの、にぎり寿司は結構ですよ。あれは片手で握りますよ、こうやって（にぎり寿司のしぐさ）。だからこれは“にぎり”ですね。にぎり寿司

です。これは“おにぎり”じゃありません、おむすびですね。

で、お婆さんのこう握っているのを見とったらね、ただこうやりゃしませんよ（片手で握るしぐさ）こうやってね、こうやりますよ（両手で包むようなしぐさ）。結んでいるんです。だからお婆さんの心が入ります。そういうおむすびを食べていると、お婆さんとの心が通いますわね。通うんですよ。ええ。だからね、結ぶということ、これは非常にいいものですね。もう、握るなんていう言葉はやめたいですね。あれはろくな言葉じゃありませんよ、握るなんて言葉は（笑）。“にぎにぎ”なんていうことは賄賂のことでございますよ、あれは。江戸時代は、こう握り、握るんですね。だから、やはり心で結ぶ。すると、あの災害の時にね、竹田でこう（両手で包むようなしぐさ）心を込めて頑張ってもらいたいという、そういう気持ちにならないといかんですよ。

そうやって考えてみますとね、日本人というのはそういう紐の中にも心を入れる。だから、旅をしている間はこれは解かれないうんです。解いたら浮気をしたことになる。解いていませんよ。そういう歌がいっぱいあるんです、解かないという。妻の方も帰るまでは解かないんですね。こういう“結ぶ”ということを非常に大事にしております。

そういうようなことで、この日本人というのはそういう歌に見えますように、しまいに綺麗な花が咲きますと、その花に心を入れる。そして、その歌を作る。絵を描く。ね。だから、日本人のように絵が、花そのものを描いたというのは、洋画にはなかったんです、あれは。洋画はたいてい神様か王様か、マリア様かキリスト様か。そのモナリザも人物像です。その裏に、ちょっと背景に自然がでてくるんですね。

だからモネという方がですね、睡蓮の絵を描きましたのは……、モネの家に行ってお覧なさい、パリへ。残してありますが、もう日本画だらけです、飾られて。庭園も日本庭園ですよ。池があって、築山があって。太鼓橋がある。そういう日本びいきの人が初めて「睡蓮」という、花そのものを描いた。しかし向こうじゃ、あれは売れません。とうとう日本人が買った。

あれもそうですね、ゴッホの「ひまわり」が。あれはゴッホが弟に宛てた手紙に……「ゴッホの手紙」というのは岩波文庫で載っていますよ。これぐらいの1冊になって。弟によく手紙を出している。それを読んでみますと、あらゆるところに、至るところに、自分の絵は全部日本画からヒントを得たんだと書いてあります。全部。そういう人がヒマワリそのものを描くんですね。

そういうように、花そのものに自分の心を入れて描く。鳥が鳴きますと、鳥の中に心を入れて、ね。鳥の声を歌にする。こういうことをやってきたんですね、日本人というのは。

万葉集時代に一番歌で取り上げられている鳥をご存じでしょうか。一番詠われているのは、ホトトギスなんですね。あれは日本人とは切っても切れません。ホトトギスはちょうど5月頃渡ってきます。渡り鳥です。するとあのホトトギスが鳴きますとね、あの鳴き声で田植えを一斉にはじめる。田植えの時期を知らせる鳥なんです。だから、しまいには“時の鳥”なんて。あれは田植えの時期を知らせる鳥だから、“時の鳥”とか書くんですね。優

雅ですね。ホトトギスの声が鳴きますと、一斉にみんな田植えをはじめます。で、そういうホトトギスの声が聞こえる範囲が“村”になって発展していくんですね。

こういうところに日本の地域文化が、だから、文化というのは、日本の場合はそういう“耕す”“稲を植える”というような農耕的な色彩が非常に強いとすれば、地域を離れてないんです、だから地域文化というのはそういう、非常に素晴らしい意味があるんです。日本の場合。そこにひとつの文化が発展して。

稲もそうですね。稲は、日本の場合に非常に大事なんですが、稲の神様を、日本の場合特に“早(さ)”といったんです。“早(さ)”というのは、稲の神様のことですよ。だからどうですか、稲の苗を何といいますか?“早苗”なんです。稲の神の苗なんです。そして、早苗を植える、だいたい昔は乙女が植えていたんで、神聖な儀式をするときは、この乙女が植える。乙女が。この乙女を何という?“早乙女”でしょ。稲の神の乙女なんです。

そして終わったらですね、ちょっとこの稲の神が天に昇るんです。だから天に昇りますからね、そのお祭りを、直会(なおらい)をしますね。これを何と、こちらの方では“早昇り”といいませんか?稲の神がのぼりますので。“早昇り”。福岡の方では“早なぼり”ともいいますね。早なぼり、早のぼり。これは天に稲の神が昇るんです。もう帰っていくんです。

そして、その時にちょっと一杯、ね、神に御神酒を捧げます。あれを何といいますか?“酒”というんです。稲の神の気です。空気の“気”を書くんですね。“早気”という。気という字は「万葉集」ではみんな“け”です。だからこれは“さけ”という。あるいは“ささ”ともいうんです。“ささ”とか“さけ”ですね。私の名前なんかは“佐々木”というんですね(笑)。“き”というのは、器を当てます。酒を入れている器になるんですよ。それで私は酒が好きなのでございますけれども(笑) 本当、そこから来ているんですよ、“ささ”というね。

そして、そういう稲の神様がいる月を何といいますか?“さつき”というんです。中国の漢字で書くと“皐月”と書きます、あれは皐月(こうげつ)です。“さつき”という言葉はさっきの、稲の神がいる月なんです。“さつき”。そして水が必要でしょ。植えたら、一番。だから、稲の神が水を垂れます。さ、みずたれ。さみずたれ。何ですか、これは?“五月雨(さみだれ)”になるんです。五月雨をあれ、何で“さみだれ”といいますか?稲の神が、“早(さ)が水垂れる”から“さみだれ”、五月雨になるんですね。

するとね、もう一つね、下ってくる時があるんです。“早くだり”っていうのがあるんですよ。早くだりの儀式をするところがあるんですよ、ある地方では。稲の神が下る。これは4月の終わり頃ですね。それじゃ、その早くだりはどこから、天から降りてきてね、まずどこに入るかというと、倉庫があるんです。稲の神の倉庫が。これは何でしょう。稲の神の倉があるんです。“桜”なんです。だから桜は、あの幹は、稲の神がまず大地に降りるために入る倉庫なんです。倉なんです。“さくら”。それで花が散って行って、大地に降りてくる。これが“早くだり”なんですね。

だから日本の和歌ではですね、桜の花が散るのを非常に愛しているでしょう。歌はみなそうですね。満開というよりも散るのを。“久方の 光のどけき 春の日に しづ心なく花の散るらむ」なんですね。そうすると、その散る具合が実によかったら、今年は豊作ということになる。そういう占いがあったんです、ちゃんと。桜の散り方によって今年を占う。そういうね、桜というのはそういう意味があるんです。だから、桜の花の散るのを惜しんだんですね。非常に愛したんですよ。

だから忠臣蔵でも、浅野内匠頭が切腹する時は必ず桜を散らせるでしょう。あれは、史実は桜は散ってないんですよ。散らさないと忠臣蔵にならんのですわ。それと同じように桜が散る前、前兆が雪です。雪が、桜の花がちょうど落ちるように、稲の神が落ちる。だから、雪がたくさん降りますと、あるいは雪の降り方によっては豊作になるというので、雪が降るのもまたいいんですね。だから忠臣蔵の討ち入りには、必ず雪が降っている。あれも史実は雪降ってないんです、あの晩は。それでも降らせないと、忠臣蔵にならんのですね（笑）。それぐらい日本人というのは花を愛し、雪を愛した、というような。そういうところから、農耕が文化にいくんですよ。そこなんです、つながりは。

だから農耕、すなわち文化。そこから文化が産まれてきているということ、私たちは考えていかなくちゃならないわけなんですね。しまいには石にまで心を入れるんですよ。

この歌、いいですか、もう一首だけ「万葉集」聞いてください。3番目の歌。

「信濃なる 筑摩の川の」「細い石」と書いて“さざれし”と読みます。“さざれいし”となりますと、あれになりますね、国歌。平安時代は“い”を発音しますが、万葉時代は“い”が消えて“さざれし”という。別府に流石（なげし）通りというのが“なげいし”ですけど“なげし”と略しますね。あれと同じです。「細石（さざれし）も 君しふみては玉と拾はむ」

これは女性の歌ですよ、“君”が出てきますから。実は夫がですね、信濃ですから長野県のところに県庁、当時の国府ですね、国府が千曲川のほとりにあった。そこに奈良から赴任してやってきて、その夫がそこで亡くなっちゃった。その後を慕って、妻がやってきて作った歌なんです。その夫が通っていた道、ここを夫が通った道だな。ふとそこを見ますと、小さいきれいな石があった。その石を拾い上げて「ああ、これはきっと」、「君し」の“し”は強めの助詞ですから、強めの言葉ですから、「きっとあなたが踏んだ石に違いないと思う。私は大事に、宝のように拾って持って帰りたい」。

君し踏みては玉と拾はむ。とうとう石にまで心を入れるんですよ。これは非常に重要です。だからこれがどんな大事な、こんなに物が発展してきて、物の中に心を入れるというこの生き方。

（ご自分の時計を示して）これはボロ時計です。まだ巻かなきゃいかんのです、こうやって。こうやって巻いておりますとね、友達が見て「そんなボロ時計持たんで、今5,000円出しゃいいデジタルがあるよ」ってね、教えてはくれます。買うてはくれませんか（笑）。で、一生懸命こうまわしてね。

大学というところは、教室に時計をおかないんですね。この自分の時計で90分間の講義をします。この間もこれでやっておりましたらね、学生が何かワーワー、ザワザワ騒ぎだした。「何だ君たち、静かにしないかーっ！」って言ったら、前にいる女子学生さんが「先生、もう30分も過ぎていきます」と言うんですね。時計を見ると、止まっておるんでございます（笑）。「まことに済まなかった」と言ってすぐやめました（笑）。また修理に出して使う。今日はしっかり巻いてきておりますから、時間が来たらやめなくては、やめませうけれど。

なぜそれほどまでにこれを大事にするかということ、これは21年前に死んだ親父が持っていた時計なんですよ。私とこの親父のつながりというのはね、私が生まれて3日目に母親が死んじゃって、そして親父が85までずっと独りだった。それでお婆さんが6年生まで育ててくれて、お婆さんが6年生の時に死んじゃって、あとは兄貴と2人だったんですが、その兄貴も太平洋戦争の12月8日のマレーの敵前上陸で戦死しちゃった。戦後はもう、親父と2人だけだったんです。その親父が死ぬときに持っていた時計ですよ。

これを見ますとね、親父のいっぱいいろんな思い出がこれに詰まってるんですよ。今の世にいない親父の心が、これにあるんです。息を引き取る時の声さえ聞こえて来ますよ。すると、大事にせざるを得ないでしょ。ね。だからこんな機械になっても、心を入れようとしたら入れられるし、入れなきゃいけないのが21世紀じゃないでしょうか。そういう意味での心の安定が、物の中に心を入れるということで本当に心の安定があるんだと思うんですね。そういう文化をつくり出していかなきゃいけない。

だから大分県はですね、平松知事さんの素晴らしいアイディアによって一村一品の県であると同時に、世界的にも有名になってきている。しかし、一村一品。それだけでは…。もう一つ、心の一村一文化を進めていこうというのが、大分県の一村、この、そこに書いてありますような一村一文化振興計画というものを出されましてね、そして補助金までだそうと。ええ。

で、これは民間と、行政とがタイアップして、協同で進めていかなければできません。特に補助金、いわゆる予算の方が、民間だけではどうしてもできません。そこで、行政がそういう補助金もいっぱい出して、こういうことを考えているのが、大分県のこの一村一文化振興計画というものだと思うんですね。イベント開催、あるいはこの広報啓発費、あるいは文化団体のこの推進費だとか、そういうものにずっとやってきておるんですね。これは非常に私は重要なことだと思うんです。特に予算といったハードな面は、これは行政にやはりお任せしていただかなきゃならない。行政と民間とが協力してやる。そういうものが村づくりに、ひとつやっぱり重要なものを持っているのではないのでしょうかね。

そしてその文化は、単なる文化だけに閉じこもっているのではなくて、土地の産業ともつながり、土地の観光ともつながって、いろんなものにつながって、多くの人たちがまたよそから来ると。ね。活性化。そういう町づくりへ、一村一文化運動というのが進められていかなきゃならないのではないかと思うんですね。

そういう点で、ちょうど私が10月に万葉の人たちを、だいたいいつも20~30人くらい連れては万葉の旅をするんですけど、この10月には6、7、8日に富山の高岡市へ行ったんです。これが万葉編集者であります大伴家持が、越中守で赴任5年間いたところですよ。だから、家持の歌だけでも273首もあるんです。だから万葉の宝庫です、あそこは。富山市のちょっとひとつ手前にこの万葉の高岡市というところがある。この高岡市に、国府があったんです。そこに県庁がですね。家持の国府があった。そこで詠まれて。高岡市の中心に歌碑だけでも60何基ありますよ。これを廻って歩いたら大変なんです。そして今、高岡市は万葉一色です。もう、学校の名前に、小学校の名前に「万葉小学校」というのがあるんですよ。病院も「万葉病院」、婦人会も「万葉婦人会」、饅頭も「万葉饅頭」なんてね(笑)。もう、何もかにも万葉一色なんです。

そして10月の、本当は1、2、3日ですが、今年はねんりんピックがありましたので6、7、8の3日間。この3日間をね、通してやるのがね、万葉集4,516首を昼夜通して朗舟するんです。朗詠するんです。これが高岡城の堀、この堀にね、舞台をつける。水の上に水上舞台を作りまして、その上に当時の、男は男で万葉の服装をしてね、女は衣裳を着てですね、そして朗詠する。これを全国から朗詠する人を集めるんです。もちろん高岡市からしてもらいたいという人たちは、万葉研究会の人とか学者は呼ばれていくんですけどね。あるいは俳優さんなんかは呼ばれていく。

この前は私が行ったときは、第1首をですね、雄略天皇の歌、「万葉集」。これを犬養孝先生という、万葉の文化功労賞をいただいた。ちょっと足が悪いんですけども、それでもおいでになる。一番最初の第1首目を。私が37首から40首までを詠んだんですけどね、全国からワッと希望者があったんです。公募していますから。ワッと来て、そして、特に夜、水上舞台の上で、この万葉を詠むと、すごいんですよ、これが。中には下手なものもありますけどね。下手なものもありますけども、実に照明がパーッと当てられて、もう本当に、1,300年前、万葉時代にタイムスリップしたような気持ちになりますね。そして全国から人たちがワッと来ている。

こういうのがひとつの「万葉集」という、そこには恵まれたものがありますけれども、「万葉集」というものをひとつの町づくりの核に置いてやっているわけですね。それだから、非常に価値がある。万葉歴史館なんていうのも非常にいいですよ。大伴家持のね、人形にしてももうちょっとアニメに近い人形劇をやるんですけどね。そして、その歴史館の下は「万葉集」に関する全国の本が全部集めてある。論文も国会図書館からのコピーを写したやつを全部並べてある。その中に入ったら「万葉集」の研究はすべてできる。こういう町づくりをあそこはやっているんですね。

だからやはり、何かの、核を見つけることが非常に大事ですね。そんなものはたくさん、今日もちょっと益田市の市長さんのお話をお聞きしまして、ちょうど私は先週石見海岸を、いわゆる島根の海岸をずっと「万葉集」の後、ちょっと35名あたり連れて行ったんですけど、あの柿本神社なんかね、あの柿本人麻呂が植えたというあそこの綱、よさみを見て

いる時にですね、その記念に植えたという松の木が残っている。樹齢800年と書いてありますが、もっと私は古いと思います。人麻呂が植えたとしたら。古いですよ、実際。樹齢800年の松というのはちょっと珍しいですね。杉とは檜はあります。これは、千年ものが。しかし、この1,000年近い松の木というのは、実に見事ですね。これ見ただけでもね、「はあー、これは人麻呂が植えたんだな」という気になりますよ、本当に。

そこで人麻呂が亡くなっているんですよ。鴨山という山で。この鴨山を益田市の沖の島にするか、これは梅原猛さんの説ですけどね。あそこの島にするか、斉藤茂吉先生のように江津市の奥の山に、湯抱温泉というのがありますが。あの湯抱温泉の山にするか、これは大問題なんです。私もその湯抱温泉の、茂吉が指定した鴨山のところに行ってみました。鴨山という山ですので「鴨山の 岩根しまける 吾をかも 知らにと妹が 待ちつつあらむ」、そこで死んだのを、妻は知らないで待っているでしょうという。これが時世の歌です。それが、そこに湯抱温泉の山か、それともこの、あそこに、人麻呂が来るというようなことはですね、ちょっとやっぱり朝廷に仕えた人がですよ、あそこに来たというのは、これはひとつ推理していく問題が非常にあると思うんですね。梅原猛先生はこれを流刑説にとって、あんな相当位の高い、正三位なんですよ、だいたい。そんな正三位の人麻呂がなぜあそこにやってきたか。すると、これは流刑しかないんだ、という説を採られている。そして水刑死された。「岩根しまける」という、岩を体に巻き付けられて海の底に沈められたんだ、と。これを論文にまとめられたのが、いわゆる「水底の詩」という上下の本なんですね。これは完璧に、昭和9年に設定しました斉藤茂吉の「鴨山の詩」を完璧に打ち壊したわけですね。

そして益田市の沖のちょっと島が、鴨島と、昔は島と山は同じ字を使いました。滝尾にも滝尾の“碓山”と“碓島”というのがありますね。あれは島だったんです。だから、同じ字を使っていますから、歌を忠実に詠めば、岩を体に巻き付けられて水刑死されたんだという説が、それが益田市の沖のあれだということですね。これも、私は梅原さんに会った時にですね、あれは大宝律令からの律令制の中には、日本の死刑は水刑死というのはいないんです。岩を体に巻き付けて、水の底に沈めるというのは、ないんですよ、律令に、法律には。だから「先生、これは法律には、律令の中にはないんですが、これはどうでしょうか」と言ったら「あっはっは」と笑って、澄ましておりましたけどね。まあ、ここらへんの問題は残りますね。これはもうやっぱりね、人麻呂があそこで亡くなっていることは、もう間違いないでしょうねえ。

すると、ああいうものが中心に、ひとつの町づくりの核としたら、あの松はもうね、連れていった連中の、初めての連中が「うわーっ」とみんな感嘆しちゃいました。そういうね、何か町づくりの核というものを見つけるということが、地域文化の大事な掘り起こしになるんですね。そしてそれは、そこの地域独自のものがいい。地域に根ざした、そして住民が納得できる、そして郷土の顔になる、誇りになるものですね。できれば地域に根ざしながら非常にグローバルにね、世界につながっていく。

雪舟さんなんていうのは、これは世界につながっていくんですよ。ね。あれは外国が切手を、ちゃんと雪舟さんの切手を作っとるでしょ。あれはどの国でしたかな。何たって、10人の世界の文化功労者ですからね。これは世界につながるでしょ。また、雪舟さんは中国にも行っている。先ほどもご発表ございましたが、中国とまたつながって、そういうネットを作っていく。それには素晴らしいんです、雪舟は。この核は。この顔は。やがては外国とのつながりが出てきますよ。切手を作っとる国の都市とどこか姉妹都市を結べばいいんですし。そうして広がりを持つんです、これは。

そういう、やはりあのグローバルな文化にあって、国際的なものになって、これからは。平松知事さんが非常にそれを「コミュニティはグローバルなものへ。世界につながる」と。そして「世界の情報発信地が自分とこだ」という。こういう考え方で文化運動をやろうと。私は、これは非常に素晴らしいと思うんですね。だから、そういう広がりを持つことが大事で、また地域に根ざして我々農耕民族は、稲作民族はあくまでも地域に根を下ろして。しかし、それが国際化に広がるような、そういう地域の顔、核を、文化を掘り出して、そしてそれを広げていくというふうなことが、これから非常に重要なことだと思うんですね。

だから沈墮の、雪舟がですね、雪舟さんが沈墮の滝を実際に見て、そして「鎮田瀑図」を描かれた。あれは、日本の画期的なエポックですよ。画期的な作品ですよ。というのは、中国で学ばれた北宗画をですね、そういうところは普通こう頭で描くんです。それを実際の景色を見て、それを写実しながら描くという、それを一番初めに描いたのがこの「鎮田瀑図」なんです。するとこれは非常にエポックな、画期的な作品なんですね。

そういうことを考えていきますとね、この雪舟というものを町の顔、町の核として文化運動を広げていくということはですね、これは素晴らしいことで、こうやって、そのゆかりのある6つの市町の方々がここに集まって、このネットワークを作るといふ。実に見事な、私は文化運動だと思います。だから先ほどここに、6人の首長さん方が集まられて並ばれて、腕を組んでこうやった時は、私は何か雪舟さんがぐーっと、降りてきたような、そんな気になりましたよ。いやあ、とね。地域にありながらグローバルに、世界に広がっていく、素晴らしい文化の核ですよ、これは。大いに素晴らしいと思います。

まあ、そういうことで、広げていきますと、ここに町づくりとして、水墨画教室を詫間先生からご指導していただいて、そして今、子供なんかでももう何百人もこの水墨画会、そして展覧会ができる。また県下から、全国から水墨画を集めて展覧会をやってもいいじゃないでしょうか。そして、この町にどっかのちょっとよそから来たような人が集まったようなところには、墨と紙と絵筆ぐらいを置いておいてですね、そういうところでちょっと水墨画を描けると。そういうようなところを作ってもいい。いのように広がっていくんですね、これが。そういうようなことを、進めていくことが非常に重要なことだろうというふうに思うわけでございます。

だから、閉じこもってちゃいけません。いろんな外部の指導者の方々、外部の専門家の

方々ともふれあい、そしてそれをこのようにサミットでお互いに手を組んでですね、そして世界までそれを広げていく。全国組織に広げていく。

今度は大分県が、平成10年に国民文化祭というのを引き受けて、第10回目を。これは、大変なんだよ。私も、その基礎委員になっておるんですけども、一昨日も基礎委員会、第2回目があって。これは大変な仕事ですけど大分市中心だけでやったら、あの三重県がこの前までやったんです。この20何日ね。この三重県が、津市だけの時が、何もかも大変なんですけど、小さな町も、みんな持ったんですね。その小さな町に行って、そこでやられている文化活動に入りますと、もう実にいいんです。だから私は、大分市だけで行ったら、これはよほど気をつけなきゃいけない。

だから例えば、ここで水墨画を中心にした文化活動が、国民文化祭でもやられる。あるいは沈墮の物語の伝説、そういう民話の運動でもいい、何でもいい。何でもいいんですが、そういうようなものを進められてそして国民文化祭にも「大野町はこれだーっ」というのが出てきますとね、大変素晴らしい。

そういう意味で、どうぞひとつ、このゆかりのある、雪舟さんにゆかりのある6つの、この西日本の6つの都市が、市町村が、結び合ってネットワークを持たれまして、さらに私たちの町づくりが、大野町だけでなく、それぞれ今日おいでに、遠くからおいでになった6つの方々のまちがいが大いに活性化していくというふうなことを今回お互いにそういうことを誓い合いながら、2日間を過ごそうじゃありませんか。

それでは、これを持ちましてちょうど時間のようでございます。どうもありがとうございました。(拍手)

(司会・羽田野)

ありがとうございました。「地域文化とまちづくり」と題して素晴らしいご講演をしてくださいました佐々木均太郎先生のみますますのご活躍を祈念し、どうぞ、今一度盛大なる拍手でお送りください。(拍手)

ここで5分間の休憩を入れさせていただきます。しばらくお待ちください。

ロビーの方に出られてる方がおられましたら、中の方にお越しをいただきたいと思います。40分から雪舟トーク、「雪舟と大分」と題しまして、工藤先生も少しご謙遜をなさったのかどうか知りませんが、「雪舟を偲ぶ」というお気持ちで、これから郷土史家の工藤喬明先生によります雪舟トークをはじめさせていただきます。

それでは工藤先生、よろしく願いをいたします。